
ローザンブルグに響く歌

並木空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローザンブルグに響く歌

【NNコード】

N9720A

【作者名】

並木空

【あらすじ】

「光」を信仰するエレノアール王国。ローザンブルグ一族のペルシは、異能の持ち主だった。めげずに明るく振舞う青年とベルシュタイン令嬢のガルヴィは出会つ。秘さなければいけない能力、黙さなければならない秘蹟。

(前書き)

「ローザンブルグの白薔薇」と世界観を共有しています。

エレノアール王国の北には、ローザンブルグ領がある。

風光明媚な土地で避暑地として愛され、王家の離宮や貴族たちの別荘が点在している。

その一方で『エレノアールの大聖堂』と呼ばれるほど、神に近しい場所であった。

多くの礼拝堂、莊厳な神殿が立ち並ぶ。

この地方を治めるのは、ローザンブルグ一族。

その歴史は古く、王国創成期までさかのぼることができるといふ。

ローザンブルグ地方マイルーク領、マイルーク城。

その門をくぐったのは、やはりローザンブルグ一族であった。

ペルシ・サルファー・ローザンブルグ。

マイルーク子爵の従兄弟の一人であった。

盛夏は、この地方が最も輝くとき。

自然とペルシの表情もにこやかなものになった。

森に面したテラスに上がると、テラス窓を叩く。

若きマイルーク子爵は驚きながら、テラス窓を押し開いた。

「レフオール殿、ご健勝であられるか？」

ペルシはわざと堅苦しく尋ねた。

「ペルシ殿、いつこちらへ？」

表情一つ変えず、レフオールは言った。

感情表現の鈍さは、この従弟らしさだった。

堅実、実直、誠実　　ローザンブルグの男たちの特徴だ。

「ついさっき。

父上に挨拶しようと思つて、ローザンブルグ城へ行つたら、これ
を仰せ付けられた。

おかげで休みなしに、こつままで來たよ

ローザンブルグ一族の特徴からやや離れている青年は肩をすくめた。

「では、お茶の用意でも」

「いや、いいよ。」

裏口から入ってきた分際だから、歓待を受けるわけにはいかない。

……茨姫は、こちらだろう?」

ペルシは父から預かってきた手紙をレフオールに預ける。「図書館で本を探していたと記憶している」

「勉強とは、面妖な。」

あの人はそういうことが嫌いだったと思っていたよ。私がここを離れている間に変わられたのか?」

ペルシは青鈍色の瞳を見開く。

茨姫ことラメリーノ・ガレナ・ローザンブルグは、縛られることが大嫌いだった。

ローザンブルグ娘として生まれ育つことに反発しているのだろう。

自由奔放な振る舞いからついたあだ名が茨姫。

華やかな美貌と刺々しい物腰、まさしく野茨だった。

もつともペルシの記憶の中には、3年前の姿しかないのだったが、「心境の変化だそうだ。

王女が読書家だから、呰わせていくうちに本が好きになつたという可能性もある」

レフオールは言った。

「肝心なことを言つのを忘れていた。

婚約おめでとう。

白薔薇姫は大変お美しく、素晴らしい人柄なのだろう?

「ありがとう」

嬉しそうにレフオールは笑う。

次期ローザンブルグ公爵として、気難しい親戚たちに囲まれて育つた青年だけに、そういう表情は貴重だった。

「ところで、今日は礼拝堂に立ち寄つてもかまわないかな?」

ペルシは慎重に切り出した。

「この時間なら、大丈夫だろ?」

「ほかの時間はダメなのか?」

「王女が朝に夕に、祈りを捧げている」

「なるほど。」

鉢合わせをして、驚かせてはいけないな。

奥ゆかしい女性ならなおのこと、茨姫とは違ひ纖細だ。
時に神に歌を捧げても平氣かな?」

「もちろんだ。」

神もお喜びになるだろ?」

「寛大なお気持ちに感謝するよ、マイルーク子爵」

ペルシは懇懃に礼をした。

「お嬢さん、どの枝が欲しいんだい?」

明るい声に振り向くと、見知らぬ男性が立っていた。

ガルヴィは驚いて、手を下ろした。

花のついた枝が欲しくて、必死に手を伸ばしているところを見られてしまった。

「この枝かな?」

気取りない笑顔を浮かべた青年は、枝にふれる。

背の高い男性だ、とガルヴィは思った。

「レフオールさまのご親戚の方?」

そう思つたのは青年の身なりの良さからだった。

貴族たちが好む長衣に、髪を結わえるのはサテンのリボン。

それに、蒲公英色の髪に、青鈍色の瞳という色彩は、マイルーク子爵との共通点だった。

「これは失礼。」

私の名前は、ペルシ・サルファー・ローザンブルグ。数多くいる従兄弟の一人だ。

よろしくね、お嬢さん

ペルシと名乗った青年は丁寧に礼をする。

礼法に則った礼は、王都でくりかえし受けたもの。

「私は、ガルヴィよ」

「ベルシュタイン令嬢？」

「よくご存知ね」

黒い瞳の乙女は、びっくりする。

「ついこの間まで、王都にいたんだ。

君はとても有名人だよ。

それで、どの枝が欲しいの？」

ペルシは言った。

「その右の枝が欲しいの。

あ、その枝よ」

「はい、どうぞ」

青年は花のたくさんついている枝を差し出した。

「ありがとうございます。

あなたは背が高いのね」

「ローザンブルグでは普通の背丈だよ。

高いというなら、レフォール殿の方が高いだらう。

それで、その枝をどうするんだい？」

「リース（花輪）にしようと思っているの

「作るところを見てもかまわないかな？」

青鈍色の瞳がガルヴィの持つ枝をじーっと見る。

「ええ、どうぞ」

礼拝堂の近くにあるベンチに腰かけ、ガルヴィはリースを編み始める。

こういった作業をしていると、大神殿での暮らしが思い起こされ、

しみじみとした気分になる。

還俗し、侯爵令嬢としての日々は味気ないばかり。

王女と信仰を語らうとき、神の供物を用意するとき、ガルヴィは光に満ち溢れる気がするのだった。

「リースを作るところを見るのは、久しぶりだ。

茨姫なんて作り方を知らないんじゃないかな

「どなたのことですか？」

少女は問う。

「ラメリーノ嬢のことだよ。

彼女はとても有名人だから、茨姫というたいそうなあだ名を持っているのさ」

リースを食い入るように見つめながら、ペルシは言ひ。本当に、リースが珍しいのだろう。

「まあ、そなんですか」

少女は華やかな美貌の貴婦人を思い出す。

人を花にたとえるのは、空恐ろしいような気もしたが、彼女は野茨のようだという印象はあった。

「素晴らしいリースだね。

リースは神に捧げる贈り物の中で、一番目に素晴らしい贈り物だと思つてゐる」

ペルシは言つた。

「神に捧げるものに、良いも悪いもありませんわ。

感謝の気持ちがあれば、一輪の花も抱えきれない花束も同じです」

「一番は、歌だと思つてゐるんだ。

財を持たなくとも、祈りと歌だけは捧げられるだろう？」

青年は熱く語る。

青鈍色の瞳の輝きは、信仰の光。

神殿で15年暮らした乙女には、好ましく写つた。

「ええ、そうですわね。

確かに祈りと歌は、どんな方でも神に差し上げられるのですわ

ガルヴィはうなずいた。

「このリースを捧げるとき、一緒に歌を歌つてくれないだろうか？
神殿で巫女をしていたのなら、聖歌に心得があるだろう？」

合唱を神に捧げてみたいんだ」

「ええ、私でよろしければ」

「良かつた！」

なかなか『うん』とうなずいてくれる人がいなくてね。
むしろ、歌うなという人の方が多いくらいで。
多少の音外れを許してくれるだろうか？」

ペルシは懇願する。

「上手いも下手もありませんわ」

神にリースを捧げた後、二人は聖歌を捧げる。

信仰の象徴、絶えぬ灯火の中、初めて習う聖歌を歌う。

技巧がなく、ただ神への愛情を歌うそれは『始まりの聖歌』と呼ばれ、一番初めに教えられる聖歌として愛されている。

神殿や礼拝堂以外でも、ちょっととした集まりのときに口ずさまる。

ガルヴィは歌いながら、光の園を歩いているような気がした。

まるで大神殿の礼拝堂のように、光が満ち溢れていく。

完璧に、神への感謝を歌い上げる。

その傍らの存在に、心が震えた。

父なる神もお喜びになるだろう、と確信した。

このように素晴らしい歌声を他に知らない。

今捧げられている歌を聞く者が他にいないことが悔やまれた。
歌が終わり、ガルヴィはドレスのポケットからハンカチを取り出した。

あふれる涙をそれで抑える。

「どうかしましたか？」

背の高い男性は慌てて腰をかがめ、ガルヴィに視線を合わせる。

「素晴らしい歌声に、感動しました。

泣き虫なので、すぐに泣いてしまつんです。

お気になさらずに」

ガルヴィは涙をぬぐう。

「涙は父なる神が与えた真珠。

悲しみをぬぐい、苦しみを癒す。

でも、女性の涙は苦手だ。

どうしていいのかわからなくなる」

ペルシは困ったように微笑んだ。

「嬉しいときや、喜びを感じたときにも涙が流れてしまつんです」

少女は微笑んだ。

一時的な強い思いにこぼれた涙は、すぐさまおさまる。

「ああ、それなら良かつた。

君に不快な思いをさせたのかと思つてしまつた」

「そんなこと、ありませんわ」

ガルヴィは歌の素晴らしさを伝えようとした瞬間、乱暴に礼拝堂の扉が開いた。

つかつかと水色のドレスの貴婦人は歩み寄つてくる。

パン

乾いた音が礼拝堂いっぱいに響いた。

突然のことに、ガルヴィは怯えた。

「ごきげんよう、茨姫」

頬を叩かれた青年は、それでも貴婦人に礼儀正しいお辞儀をした。

「歌うなと言われてもまだ歌いますのね」

ラメリーノは不機嫌に言つた。

「レフォール殿のご厚情に甘えてね。

3年ぶりですが、あなたの美しさはお変わりないよつだ

「当然でしょう」

「お父上がお帰りをお待ちしていましたよ」

「気が向いたら、帰ると伝えてちょうだい」

「あなたはそればかりだ」

ペルシはためいきをついた。

「あなたに指図される筋合いはなくつてよ」

「確かに、その通りだ。」

伝言は承りました。

失礼、ガルヴィ嬢。

合唱をしていただけて感謝しています。

次……は、なさそうなのがひどく残念だ。
ありがとう

ペルシは優しく微笑んだ。

「いえ、素敵な歌声でしたわ。

こちらこそ、礼を言わなければなりませんね」
気を取り直して、ガルヴィは言つた。

「言つことなくつてよ。

歌うことを禁じられたはずよ、ペルシ」
ラメリーノは苛立ちを隠さずに言つた。

「マイルークとローザンブルグと、レインドルクの礼拝堂では歌つてもかまわないとお許しをいただいたんだよ」

「まあ、伯父さま方は心優しすぎますわ。

それとも耳が遠くなつたのかしら?

どちらにしろ、私のいるところでは歌わないでちょうどいい

「もちろんだとも。

神に誓つてもいい。

あなたの機嫌を損ねることが恐ろしい」とぐらり、私は昔から知つていますから。

では『きげんよう、美しい茨姫』

ペルシは軽く微笑むと、きびすを返した。

ガルヴィは何とも言えない気分になつた。
目の前で人が叩かれた。

体罰として存在していることを知つてはいたが、大神殿では見た

」とがなかつた。

ラメリーノという女性は、気高さと芯の強さを兼ね備えていると思つていたので、感情に駆られてそんなことをするとは。
見たばかりのことを信じじられなかつた。

「私はペルシの歌が嫌いなの」

「光に満ちた声でした」

ガルヴィイは事実を告げる。

「でしょうね。」

だから、嫌いなのよ！」

ラメリーノは言い切つた。

理解できない言葉に、ガルヴィイは指で祈りの形をつくる。

それから、3日後。
ガルヴィイは忘れるのできない一連のことについた。
「父たる神よ。

光たる方よ」

礼拝堂で祈りを捧げながらも上の空になる。

そんな気持ちのまま神の御前に立つのは、良くない。

敬虔な少女は鬱々とした気分で、礼拝堂を出た。

「ごきげんよう、ガルヴィイ嬢」

光あふれた世界の中、ペルシが立つていた。

太陽が大地を盛んに愛する季節。

そのまぶしさに、ガルヴィイは目を細めた。

「……あ、ごきげんよう。

その、お怪我は……」

「音の割りに、痛みは少ないんだ。

あの派手な音は精神にくるけどね」

ペルシは微笑む。

良かつた、と純粹に思えなかつた。

人を叩くということは、良くないことだ。

叩く方も、叩かれた方も、悲しい。

「ところでためいきの理由は、私だと自惚れてもいいのかな？」

「半分は、そうです。

歌をお嫌いだなんて、ラメリーノさまがかわいそつだと思つたん

です」

少女は言つた。

「嫌いなのは、私の歌だけだよ。

しかも、私の歌を嫌いな女性はたくさんいる。

少し散策しないか？

茨姫に見られたら、君まで怒られてしまつ

「光に満ちた声だと思つています」

ガルヴィは歩きながら言つた。

森の中は静かで、時が止まっているような錯覚に陥る。

舗装された小道は、人が入っている証なのに、ここは神の域のようだつた。

「最高の贊辞だね。

嬉しいよ」

ペルシはここにここと言つ。

「神の御傍にいるような気がしました」

「それが、気に入らないんだろう。

ここは王都と違つて、保守的なんだ。

君の目には奇異に映るかもしれない」

仕方がないことなんだ、とペルシはつぶやいた。

どんな気分だろうか。

神に捧げる聖歌を歌うなと言われるのは。

それが当たり前だということは。

ガルヴィにとつて、それは苦痛だ。

「ペルシさま……」

「ありがとう。

でも、歌うのを禁じられたわけじゃない。

マイルークとローザンブルグと、レインドルクの礼拝堂では歌つてもかまわない。

その、彼女たちが……いないときは。

昔は好きなだけ歌つて、その度怒られたよ

ペルシは己の首筋をふれる。

青鈍色の瞳がかげつて見えた。

「でも、もう大人だからね。

そんな無節操なことはしない。

やはり、誰かに不快感を与えるのは、好ましくないしね

青年は顔を上げ、明るく言った。

不快感という単語に、ガルヴィは反応する。

自分の妹のように愛しい、けれども敬愛する王女を思い出す。人目を気にして、万事控えめに振舞う姿は悲しい。

神はあるがままを良しとする。

誰かのために自分の生き方を捻じ曲げるのではなく、神の望みではない。光に向かい、未来に向かうために、人は顔を上げるのだ。

「それよりも明るい話をしよう。

私は礼拝堂の脇に必ず植えられる林檎の樹がいたくお気に入りなんだ

ペルシは先が気になるような口ぶりで語る。

「どうしてですか？」

「秋になると美味しい実をつけるだらう？

神にまず捧げてから、その林檎を厨房で焼いてもらうんだ。

焼き林檎を食べるたびに、神に感謝するんだ。

おお、神よ。

「我に焼き林檎を与えてくださるとは、なんと慈悲深い。ってね」

芝居がかつたしぐさでペルシは言つ。

「まあ」

秋が来るたびにくりかえされるだらう光景に、ガルヴィはふきだす。

自分より二つか三つ年長の青年が、子供ものよに焼き林檎を楽しみにしている。

焼き林檎は、貴族が好んで食べるような嗜好品ではない。秋が来れば誰でも口にするものだつた。

平民にとつては、たまの贅沢。

子どもにしてみれば、秋の楽しみ。

そんなものを貴族の青年が楽しみにしていることがおかしかつた。

「ガルヴィ嬢は焼き林檎を食べたことは？」

「もちろん、あります。

でも、そんなに楽しみにしたことはありません。

神殿で楽しみだつたのは、黄色いオムレツでした。

朝食にオムレツが出る日は、一日が素敵に見えました

「慎ましやかな幸福だ。

還俗した今は、毎日幸せかな？」

ペルシは尋ねる。

「私は貴族の娘なんだ、と毎朝確認しています

ガルヴィは答えた。

テーブルに、オムレツが出るのは当たり前のことだつた。どんな末端の貴族であつても、平民と比べるまでもない贅沢の中で生きている。

毎朝のオムレツは確かに嬉しいけれど、失つてしまつたものもあるような気がした。

「還俗を悔いてるような口調だ。

神官に代わつて、悩みを聞こつか？」

「いいえ。

これも神が与えてくださつた試練だと思つています。

運命を受け入れます」

少女は真剣な面持ちで言った。

「君はいまだ神殿の巫女のようだ。

とても素敵だ」

「誰の胸にも、信仰はあります。
ペルシさまのお心の中にも。

人の子はみな素敵なものです」

ガルヴィイは言った。

ペルシは何も言わずに微笑みを返した。

それから、ペルシは度々、ガルヴィイを散歩に誘った。
城壁代わりの森を散策したり、すこし遠出して湖を見に行ったり。
デートと呼ぶには愛らしい、そんな時間を共有した。

「最近、楽しそうですね。

何かいいことがあつたんですか？」

無垢な瞳を持つ王女が尋ねるまで、それほど時間を必要としなかつた。

「え……あ、その」

ガルヴィイは困った。

ペルシの話をしてもいいのだろうか。

見知らぬ男性の話だ。

「礼拝堂で会つた方、時折……お話をしているんです」

「その方は、篤き信仰をお持ちなんですね。

とても嬉しそうにしているから」

セルフィー・ユは言った。

「はい。

とても深く神の教えを従つていての方です。

それ以上に、俗世のことをご存知で。

素晴らしいバランス感覚をお持ちなんです。

見習うところがたくさんあります」

「ガルヴィイが幸せそうで、私も嬉しいです」

セルフィーユは微笑んだ。

「私も王女が幸せだと、嬉しいです。すっかり健康になつて、本当に嬉しいですよ」

ガルヴィイは言った。

「ありがとうございます、ガルヴィイ。

一緒にローザンブルグに来てくれて……。

本当に感謝しています」

「もつたいないお言葉です。

姉妹のように育つたんですもの。

王女が嫁ぐ日まで、何があつても離れません」心からの願いだった。

「ありがとうございます」

もう一度、王女は言った。

「とうとう紋章入りだ、レフオール殿」

ペルシはためいき混じりに、執務机の上に置いた。

「叔父上は、だいぶ怒っているようだな」

レフオールも手を休めて、手紙を受け取る。

「だいぶじやなくて、めちゃくちや怒つてますよ。

彼女は美しくも若いローザンブルグ娘。

早く夫を決めなきゃいけない」

青年は長椅子に腰を下ろす。

結婚を急ぐのは、周囲のためでもあるし、娘自身のためになるからだ。

貴族としての世間体のためでも、政略のためでもない。

「それなのに、彼女ときたら、あちからこちらへ。

ああ、ここだけじやないんだよ。

ローザンブルグ城以外を点々と渡り歩いているんだ。
あまりの腰の据わらなさに、みなハラハラしてる

「ペルシ殿は？」

聖王妃アネットと同色の双眸がペルシを見つめる。
「どっちでもいいかなあ、って思つてる。

もともと縛られるのを好む人間じゃないし」

ペルシは首筋にふれる。

ラメリー・ノ嬢は憂鬱の原因だった。

彼女の前では歌えない。

自分の歌が神に近しいのは知っている。

それがローザンブルグ娘に、大きな影響を与えることも知っている。

聖リコリウスが神から授けられたのは、御印の赤痣だけではない。
時に天候まで左右させる大いなる力。

それを封じることができるのは、神の御前である礼拝堂。
あるいは、大神殿やローザンブルグ城だけだ。

生れ落ちたときから手にしていた力は、3年たつても変わらない。
ペルシの力は衰えない。

「それに、美しきローザンブルグの夏は、楽しまないとね
顔を上げ、ペルシは明るく言った。

「それでペルシ殿はかまわないのか？」

「ローザンブルグ娘の前では、男というのは哀れなものだ。
それであの人の気が晴れるなら、かまわないよ」
自嘲気味にペルシは微笑んだ。

「前の手紙にあつたのだが、結婚されるといつのは？」

「ああ、それ？」

父上もうるさくてね。

そろそろ折れようかと思っている。

王都から帰ってきたのも、そんな理由だよ

ペルシは言った。

歌を歌えないなら、どこにいても同じだ。

王都だろうと、ローザンブルグだろうと、みな同じ。

「結婚は、献身と互いの愛で成り立つと思つてゐる。

「愛のない結婚は不毛だ」

レフォールは言った。

青年の立場を考えると、あまりに悲しい言葉だった。

マイルーク子爵は、王命で愛のない結婚を強いられる。

「王女さまと仲良くなれそう？」

公爵が気にしていたよ」

「まだ、未来がある」

レフォールは言った。

それが落ち込んで聞こえたのは氣のせいではないだろう。思つほどに思い返してもらえない。

そんなこともある。

仕方ないと割り切れるほど、単純な事柄ではなかつた。

「そうだね。

レフォール殿、私にも未来はあるんだ」

ペルシは泣きたい気分で微笑んだ。

嫌われない。

たつたそれだけのことが嬉しかつた。

歌を褒めてくれた。

たつたそれだけのことが、涙が出るほどに嬉しかつた。

神殿で巫女をしていただけあつて、その言葉は公平で、温情にあふれていた。

きつと還俗を惜しんだ者も多かつただろう。

吟遊詩人が語る聖王妃よりも、噂話だけの白薔薇姫よりも、ずつと素晴らしいと思えた。

湖のほとり、一人は涼を求めて座る。

「ペルシさまは、いつも暑そうな格好ですね。

そのように襟の高いお召し物で、暑くないんですか？」

ガルヴィは尋ねる。

「王都に比べたら、まだ涼しいから。

慣れてしまったよ。

それにきちんとしないと、従弟殿からも怒られてしまう。

レフオール殿は、厳格だ」

次期ローザンブルグ公爵にふさわしい従弟だった。

羨望と軽い嫉妬を覚える。

自分は従弟のように振舞えないから、諦めにも似ている。

「私は長いこと、ローザンブルグの人は寡黙だと思っていました。マイルーク城にいる方々は、仕事熱心で、私語をなさいません。大神殿よりも静かですから、そうだとばかり思っていたんです。でも、ラメリーノさまもペルシさまも、お話し上手で驚いたんですけど」

乙女はクスクスと笑う。

「土地柄かな。

嘘をついたり、隠し事をするのが苦手な人が多い。

私は数少ないその例外なんだけどね。

どうしても、本当のことを話せないときに有効なのは沈黙を保つことだ。

マイルーク城は、身元のきちんとしている人間しか雇わないから、職業意識が高いんだろう。

レインドルク城はにぎやかだよ。

城主のリーク・スコレス・ローザンブルグが話し好きなんだ」

ペルシは言った。

「確かに、歌を歌つていい城でしたね。

マイルークとローザンブルグと、レインドルク」

歌うように乙女は数え上げる。

「レインドルク城に行くと、歌うビビロジヤなくなつてしまつ。みな話し好きだから、ついつい話し込んでしまうんだ」

「それでは本末転倒ですか」

ガルヴィは楽しげに笑う。

夏の終わり。

マイルーク城では、パーティが開かれた。

白薔薇姫の16歳の誕生日。

髪に真っ白な薔薇を飾った少女は、美しかつた。

エレノアール王国の真珠と呼ばれた聖王妃アナネットのよう。

清らかで、可憐な姿。

その傍らに立つマイルーク子爵は、幸せそつだつた。

それを見て、ペルシも微笑んだ。

始まりはどうあれ、周囲の思惑はどうあれ、二人は幸福な婚約者であつた。

従弟の幸せな姿を見て、安心して、ペルシはパーティ会場を抜け出した。

「どちらへ行かれるおつもり?」

冷水をぶっかけられたような気分になる。

一番会いたくなかった人物に、こんなときには会ってしまうとは。

ペルシは笑顔を作り、振り返つた。

麗しき茨姫がいた。

珍しくベールを被つているのは、今日はつむぎ型がいるためだ。

「外の空気を吸おうと思つて」

「あら、そうなの。

少しの間、お待ちになつてくださる?」

貴婦人らしい命令に、ペルシはうなずいた。

「そうね。

これが邪魔だわ」

ラメリーノはペルシの長衣のボタンを外す。

「何を！」

「いいから、黙つて」

すべてのボタンを外し、ラメリーノは長衣を脱がそつとする。

ペルシは、その手をつかむ。

「いつたい、どういうおつもり」

「ラメリーノさま、どんなご用件ですか？」

ガルヴィイが小走りで近寄つて、足を止める。

乙女は顔色をかえ、息を呑む。

「これは、その」

ペルシは弁解しようとするが、ガルヴィイは首を横に振る。

「そんな……、その痣は」

乙女のつぶやきに、青年は気がつく。

彼女が気にしているのは、一人の関係ではなく、自分の首筋にある赤痣だ。

「王女と」

本当に小さい声だつた。

「ええ、同じものよ。

これは神のくださつた聖徵。

ローザンブルグの秘されたる恩寵よ！」

高らかにラメリーノは告げ、ベールを取る。

「なんてことをするんですか！？」

ペルシはラメリーノの手を払う。

「ガルヴィイ嬢、今見たことは忘れるんだ。

君は何も見ていない。

君は何も聞いていない。

約束してくれ」

痛いほどの視線だった。

黒い瞳は、射るように真っ直ぐとペルシを見つめる。

「あら、欺瞞よ。

彼女は王女の着替えを手伝っているんですもの。

遅かれ、早かれ、この事実を知ったわ！」

ラメリーノは言った。

「だからと言って、一族の集まる場所でこんなことをしたと知れたら……。

彼女の自由は失われる」

ペルシは焦る。

聖リコリウスが神から授かつた赤痣の秘密を守るために、ローザンブルグ公爵家は存在している。

赤痣を持たない者には、秘さなければならぬ。

たとえ、どんな手段を使つても。

「時は戻らない、ペルシ殿」

一番聞きたくない声だった。

ローザンブルグ公爵その人の声に、ペルシは口を引き結んだ。

「私の落ち度です。

ガルヴィ嬢には何の罪はありません」

ペルシは言った。

この言葉にどれほどの意味があるだろうか。

青年にはわからなかつた。

時間が凍つてしまつたようだつた。

ガルヴィは座り心地の良い椅子に腰掛けながら思つた。

「この秘密は、守り通さなければならぬ。

そのために私たちは存在している」

公爵ソージュは言った。

「今見たことを、誰にも話しません。

一生秘すると誓いを立てます」

ガルヴィは言った。

王女に関する秘密であるところながら、たやすいことだった。
沈黙の誓いを立てるだけでは足りない」

ソージュは言った。

ガルヴィはひざの上の指を組む。

神に祈りを捧げるときのように、きつちりと。

「私の命であがなうことができるでしょうか？」

声が震えないように気をつけて、ガルヴィは言った。

「悲壮な覚悟だ。

昔であれば、そうしていたところだろう。

だが、今のじ時世に合わない。

ベルシュタイン侯爵令嬢が突然亡くなつたら、大騒ぎだ」

ソージュは言葉を切る。

ためいきを一つつき、椅子に座る青年を見やる。

「そこに私の甥がいる。

ペルシ・サルファー・ローザンブルグ。

もう、お知り合いかな？

「はい」

ガルヴィはうなずく。

「どうだろう？

彼はなかなかの好青年だ。

王都に3年ほどいたこともあって、片田舎に不釣合いなほど垢抜
けている。

場を和ませることも得意だし、歌も得意だ。

彼と結婚すれば、ガルヴィ嬢もローザンブルグ家の一員だ。

ローザンブルグの秘密を知っていても、なんら不思議はない

「伯父上。

愛のない結婚は不毛だと口ぐせのように、おっしゃっていたあな

たが……！」

どうして、そんなことを……むりじゃるのですか？」

ペルシが口を挟む。

「ラメリーノが、あの場で、あんなことをした意味を私なりに考えたんだ。

あの娘は賢い。

ローザンブルグの秘密を話すのに、どうしてペルシ殿を利用したのか？

ラメリーノにも聖徵はある。

話すだけなら、自分自身で事足りるのだ」「

「……それは」

「あの娘なりの優しさではないだらうか。

この後は、良く話し合いたまえ。

無駄に血を流したくはないのだがね」

ソージュはそう言つと、立ち去つた。

居心地の悪い沈黙が漂つ。

「光と共に、光と共に。

神は常に傍におられる。

我と我らを見守ら正在する」

口について出たのは、聖典の一くさり。

ガルヴィは心が光で満ちたような気がして、ほつと一息つく。

「受難の第三場だ。

そう言いながら天を見上げると、空はにわかに晴れ渡り、大地は光に満ちた。

嵐は唐突に去り、王は旅を続けることができた。

「……君にとつて、これは嵐だらう」

ペルシは小さく笑つた。

「神が与えたもうた試練であるなれば、お受けいたします。

この世にあるすべての事柄は、神が私のためにじこ用意なされたものです。

別れも、出会いも
ガルヴィは言った。

心が澄んでいる。

ガラスのように透明になつて、光を受けている。
恐怖は静かに廻り、信仰の炎が強く輝く。

どんな運命も受け入れられる。

死は神の御元へ行くだけのこと。

恐ろしいことではない。

「歌を褒められたのは、初めての経験だつたんだ」「とても素晴らしい歌でしたわ。

もつと自信をお持ちください」

礼拝堂で聞いた歌を思い出し、ガルヴィは言った。
心が光でどんどん満たされていく。

「だから。

こんなことを頼むのは……君を馬鹿にしているようだ。
それでも、言わずにはいられないんだ」

ペルシはガルヴィの傍にひざまずくと、その手を取つた。

「私の妻になつてくれないか？」

「え」

死を覚悟していた乙女は驚く。

「君に死んで欲しくないんだ」

青鈍色の瞳は、真剣だった。

「愛のない結婚は不毛だ、と……」

ガルヴィはつぶやく。

「伯父上の意思是岩よりも強固だ。

君の愛を得られなくとも、君が死ぬよりはマシだ」

ペルシは言った。

「どうしてですか？」

生まれて初めて聞く求婚に、声が震える。

突然ことに驚いているし、真剣な眼差しに見つめられることに慣

れていないからだ。

でも、それだけではない。

頬が熱くなるのを感じる。

目が潤むのを感じる。

泣き出してしまいそうだった。

死を覚悟したときには零れなかつた涙が、今は零れ落ちそうだった。

「君を愛しているからだ」

青年は簡潔に言った。

「マイルークとローザンブルグと、レインドルク。

この3つの城の礼拝堂は、歌を歌えるんですね。

また、歌を聞かせてくださいますか？」

「もちろんだ。

君が飽きるまで、何度も歌う」

青年はぱッと顔を輝かせる。

それから数日後。

レインドルク伯爵公子とベルシュタイン侯爵令嬢の婚約が整つた。

この婚約の立役者は、レインドルク侯爵令嬢ラメリーノ・ガレナ・

ローザンブルグだという噂が真しやかに流れた。

眞偽は、神のみぞ知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9720a/>

ローザンブルグに響く歌

2010年10月8日15時09分発行